

計 | 雨 | 晴



前回に引き続き、コーラスの話をもつて書こう。と言っても私のことではなく、ある子供たちのことである。

一昨年の十月のある朝、何気なく読んでいた本紙のある記事に目が留まった。それは、私の出身地柏崎の山奥にある鶴川小学校が、初出場の県芸術祭の合唱部門で審査員特別賞を受賞したという記事であった。一六一年生総勢わずか十三人のこの小

学校が全員出演で見事なハーモニイを聞かせてくれたとあった。この記事を読んだ途端、心にシーンとくるものを感じた。これだけの学年差のある（声の質が異なる）小学生をひとつのハーモニイにまとめあげるのは大変難しい。そんなハンディにめげず、小さな一、二年生が上級生について、一生懸命大きい口をあげて歌っている姿が目につかんだからである。そしてまたこの子供たちは、この地方に五百年前から伝わる綾子舞を守っている子供たちでもある。年々進む過疎化の下で、この舞を守り伝えていくことがいかに難しいか地元の人から聞かされていた私は、この受賞に対し心の中で思わず拍手を送ったのである。

綾子舞の子供たち

その後、県の教育関係の月報への随筆依頼があった時、この子供たちの事を書いた。今思えばやや一人よがりな言い方だったがもしれないが、「現在、教育界に種々の問題がありながら、その解決への努力の大半が

平山 征夫 (日本銀行 新潟支店 長)

現場を預かる教師にゆだねられたままであることも承知している。しかし、それを問題にする前に、子供の心に、強くて温かい何かを残せるのは、毎日教育の現場に立つ教師自身の個性と子供への熱い心しかないと、もう一度この事例から思い起こしてもらいたい」と…。

まもなくして、この小学校の先生から電話があった。奇遇にも高校時代の親友S君の弟であった。その時彼に「機会があったら一度子供たちのコーラスを聴きに来て下さい」と言われたがまだ行っていない。そして、この小学校では春には二人の卒業生を送り出す。しかし、新しく入ってくる子供はいない。

「晴雨計・その後」④

「綾子舞の子供たち」

平山征夫

綾子舞を伝えてきた鶴川の子供たちの小学校は、二十四年前のあの随筆から四年後平成七年春閉校となった。最後は五・六年生合せて四人だけだった。

私は閉校前にその四人の子供たちを県庁に招いた。綾子舞を守ってくれたお礼の積りだった。緊張して知事室に入ってきた子供たちにケーキと紅茶を御馳走して「綾子舞守ってくれてありがとう。新しい学校でも友達と綾子舞頑張ってるね」と激励した。山奥の二つの集落だけで

は守りきれず、中学校の部活等広域で守ることになっていた。

そして閉校前に開かれた閉校記念「綾子舞と合唱演奏会」を覗きに行った。合唱は卒業生も加わった七人で、東日本合唱コンクールで優秀賞を取った「七つの子」や「さくらさくら」などを透き通った歌声で聴かせてくれた。最後は飛び入りで私も一緒に校歌を歌った。渡された楽譜の下のひらがなの歌詞を追いながら歌った。その歌詞の中に「やまざるごとき・・」とあったので、唯一の男の子のF君に「山猿が出るのか」と聞いたら、「うん、出るよ」という返事だった。でもそれは私の早とちり、後から送られてきた閉校記念誌

にあった縦書きの校歌には「止まざるごとき・・」とあった。

それから数年後、高柳・じよんのび村に出かけた私は鶴川小学校に寄ってみた。春先地面が温まり溶け出した雪はあたり一面を靄となつて包んでいた。木造の古い校舎はその中にひっそりと建っていた。子供たちの歓声はもう聞こえなかったが、鍵がかけられた玄関から覗いた下駄箱にはあの頃のまま四人の名前が残っていた。この綾子舞の子供たちとは、中学生の時一度鶴川村の催しで逢ったのが最後となった。

演じられるようになった。昨秋晴れた日、私は思い切つて見に出かけた。そこで私が社外取締役を務めているB社の部長に遭った。「部下の女子社員が踊るので・・・」という。それを聞いて過去と現在が一挙に繋がる思いがした。私の出張等の清算事務などをやってくれる女子社員の名字が、あの子供たちの一人と同じだった。そして小五の時以来十九年ぶりに見る彼女の小原木踊は見事なほど優雅だった。聴けば他の三人も鶴川を離れて県内で父親・母親になつて家庭を築いているとのこと。月日は確実に過ぎていた。

(平成二十七・六・十七)